

砂丘という風景の「発見」

小谷 沙緒里

The “Discovery” of Sand Dune as Scenery

Saori KODANI

はじめに

鳥取砂丘は、現在、鳥取県きっての観光名所のひとつとなっており、その土地の珍しさから2010年にはジオパーク¹⁾の指定を受けている。風景の美しさを眺めるだけでなく、サンドボード、パラグライダー、イルミネーション、砂像フェスティバルなども行なわれており、多くの観光客を楽しませている場である。また、観光ガイドブックには砂丘と駱駝の組み合わせの写真やモチーフが多く見られる。民間の会社が砂丘付近で駱駝を飼育しており、観光で訪れた人が駱駝に乗り、砂丘遊覧が出来るようになってきているのだ。このように、現在では、風景としての価値を認められ、エンターテインメント性も高い場であると考えられている鳥取砂丘だが、実は明治時代末までこのような価値は見出されていなかった。小学生の運動会の会場や、軍事訓練の場として使用されていたようである。では、いったい鳥取砂丘はどのようにして見る価値ある美しい風景の場だと認識されるようになったのだろうか。

本研究では、国立公園やジオパークのきっかけとなった砂の大地・砂丘が、現在のような価値をどのように得たのか、考察を行なう。

「発見」される以前の鳥取砂丘

前述のように、鳥取砂丘は現在の観光パンフレットに必ず現れる場となっている。しかし、この場はもともと風景としての価値が見出されていた場ではない。

『鳥取県史 近代第3巻 経済篇』（鳥取県、1969年）によると、明治時代初期は一般の人々が気軽に観光を行なえるような時代ではなかった。江戸時代に人気のあった「お伊勢参り」のようなものが、現代で言うところの観光旅行に当たる。しかし、これは村の代表者が神社・仏閣をめぐるものであり、私達の考える観光旅行とは異なるものである。当然、このころの鳥取砂丘も、美しい風景を眺める観光地

という認識はされていない。地元の人々がその場に行って何かを楽しむ行楽地という認識が強いため、外から来た人々に紹介し、見て楽しんでもらうような場ではなかったと考えられる。

鳥取では「浜出」といつて浜坂砂丘に出かけることが以前から盛んで、中でも袋川を下る屋形船が流行し、夜、川面に映る提燈の火がよかったという。こうして浜坂の小すりばちや十六本松が行楽地として賑わいを見せた²⁾。

鳥取県史の観光の章では、砂丘について上記のように述べられている。浜坂の小すりばちとは、現在の鳥取砂丘の一部である。引用文から、この地が行楽地として人々に親しまれていたことがわかる。では、鳥取砂丘が楽しむための場ではなく、風景としての価値ある観光地となったのはいつ頃なのだろうか。

鳥取県の観光資料で古いものをあたると、明治時代に4冊の観光案内書が作成されていることがわかる。一番古いものは1904年（明治37年）の『山陰五州避暑案内』で、因幡、伯耆、出雲、石見、隠岐の山陰の5地域が紹介されている。各地域について1章ずつ紹介されており、2章に因幡、3章に伯耆の地が収められている。因幡の章では、鳥取県東部のお寺、城跡、滝や温泉、古墳、神社、山などが紹介されているが、砂丘に関する記述は見られなかった。次に古いものは1907年（明治40年）発行の『鳥取案内記』である。この中には、「浜坂遊覧」という項目で、砂丘が紹介されている。

浜坂遊覧

漠々たる白砂点々たる青松漫々たる蒼海綿々たる千代の清流皆是れ浜坂海浜大砂漠の光景なり。実に三万余鳥取市民の一大極楽園なり。貴賤郎老幼男女の一大運動場なり³⁾。

『鳥取案内記』は、当時の皇太子、後の大正天皇

がこの地を訪問する際に作られた、鳥取の市内や名勝地などを紹介したものである。この記述がはじめて鳥取砂丘と思われる地を紹介した観光資料となっている。しかし、この中では、市民が運動場としてこの地を利用していることが述べられており、砂丘は行楽地としての使用が一般的であったことがわかる。さらに、現在の観光ガイドブックにみられるように、砂丘が砂の大地単独で紹介されているわけではない。「白砂」、「青松」、「清流」といった言葉を使用していることから、日本人にとって「美しい海岸風景」の代表である「白砂青松」の風景を重ねることで、この地に風景としての価値を持たせようとしていると考えられる。そのため、この時期、砂単独での土地は風景として評価されていないと考えられる。

この次に作成された案内書『鳥取案内』（鳥取県・鳥取市役所、1911年）には、砂丘についての記述は見当たらない。緒言では、「我山陰道は天然の風景に富み、神代の遺跡、著名の古戦場其他勝区、靈蹟頗る多きも、従来交通不便の為来り問うもの少な」かったが、「今や交通機関の完備に伴ひ、（中略）観光の客亦日に増し月に加わ」ってきているので、「鳥取案内を編述し、聊か遊子観覧の便に供し、兼て本市の概要を大方に紹介」しようとしていると書かれている⁴⁾。このことから、この案内記で砂丘を取り上げることは、鳥取砂丘を観光地として内外の人々に知らせるには絶好の機会であったと考えられる。それにもかかわらず、この資料に記述が見られないことから、砂丘は風景としての価値、美しい眺めの場として「発見」されていなかったと言える。

しかし、翌年発行された同タイトルの『鳥取案内』（鳥取市役所、1912年）には、鳥取砂丘が「東浜」の名で登場している。

東浜

岩美郡中ノ郷村大字浜坂村の砂漠は、海浜は直に賀露港に隣接し丘陵起伏して東南摩尼山に連亘して、服部村大字細川村に至る、其廣大なること、日本無双の称あり⁵⁾

1912年の『鳥取案内』は山陰線全通の記念として発行されたもので、前年のもの同様、県外の人々の目に触れることも意識して作成されたものと考えられる。作成された経緯や目次から推測すると、1911年の『鳥取案内』も1912年のものも内容に大差はみ

られない。しかしながら、1911年のものに砂丘に関する記述がないということは、鳥取砂丘が観光において重視されていないと言えることができるだろう。このような傾向は、大正時代に入ってからも見られる。大正時代に作成された案内記には、1921年（大正10年）の『大正の鳥取市案内』、1922年（大正11年）の『大正の鳥取』がある。前者のものには、1912年の『鳥取案内』と全く同じ「東浜」の記述が見られ、後者の観光資料には、砂丘に関する記述は見られない。これらのことから、明治・大正期には、鳥取砂丘は観光地として必ず紹介すべき土地であると認識されているわけではないと考えられる。

大村康久編の『鳥取砂丘』（富士書店、1993年）では、観光地となる以前の鳥取砂丘について、浜出や小学校の運動会での使用等が取り上げられたあと、砂丘風景について次のように触れている。

こうした砂丘とのかかわりも、砂丘そのものが注目されたわけではなかった。美しい風紋や滑らかな砂の稜線。戦後、うたわれた砂丘の自然美は全く顧みられなかった。（中略）「浜出」といっても、その場所は限られていて、砂丘の大部分は人もめったに近づかない荒涼とした大地だったのである⁶⁾。

このような記述や、前述の行政が作成した案内記の記載から、明治時代の鳥取砂丘は、風景としての価値ある土地という認識をされていなかったことがわかる。しかし、浜出や小学校の運動会の使用など、この地が人々に全く活用されていないというわけではない。県外の人々に知らせるような、案内記に必ず登場する場所ではなくとも、地元の人々が訪れる行楽地として人々に受け入れられていたと考えられる。日本国語大辞典第二版第5巻によると、行楽とは「①楽しむこと。遊びの楽しみ。②郊外などに出て楽しみ遊ぶこと。」⁷⁾であり、また日本国語大辞典第二版第3巻によると、観光は「他国、他郷の景色、史跡、風物などを遊覧すること。また、風俗、制度等を視察すること。観風。」⁸⁾とある。行楽が「遊ぶ」ことに重点を置いているのに対し、観光は「見る」ことに重きを置いている。そのため、行楽地と認識されていた鳥取砂丘は、「遊ぶ」ことに価値を置いている土地であったと考えられる。前述の『鳥取案内記』の引用文にも、「貴賤郎老幼男女の一大運動場なり」とあることから、観光資料の中に登場しな

がらも、砂丘という土地は風景を眺める場としてではなく、「遊ぶ」要素のある土地として記述がされているのである。

このように、観光資料に登場しながらも、行楽地、遊びの土地という価値を持ち続けている鳥取砂丘であるが、観光の持つ「見る」価値を見出されていると感じる部分がある。それは、同じく『鳥取案内記』の「漠々たる白砂点々たる青松漫々たる蒼海綿々たる千代の清流」という、「白砂・青松・清流」の部分である。「白砂青松」という表現は、日本人が古くから考える海岸美を表すものである。鳥取砂丘は海に接しているのだから、海岸として捉えることもできる土地である。そのため、海岸として扱い、日本人になじみのある風景美を重ね、人々に見る価値のある観光地と認識させようとしていると考えられる。このように海岸美を重ねることで、風景美としての価値を持たせようとしていることは、逆に、日本人が本来、砂丘のような砂のみの土地には風景としての美しさを感じていなかったことを示しているといえよう。「白砂」「青松」のない砂地だけでは、風景として「発見」されていなかったのだと考えられる。

鳥取砂丘の「発見」

昭和に入ると、これまでとは打って変わって、多くの観光資料の中に砂丘が見られるようになる。

【鳥取砂丘】

鳥取の北三軒。千代川の下流を挟んで東西凡そ十六軒、南北二軒に亘り、河西を湖山砂丘と云ひ、河東は二つ山までを浜坂砂丘、二つ山以東駟馳山麓までを海士砂丘と称し、浜坂砂丘は最も広大で標式のものである。概ね石英砂より成り、移動性を有する。砂丘間に播鉢と呼ぶ馬蹄形の窪穴が存在し、大小三十を算し、高さ約三〇米、長さ約六四〇米に達するものがある。桑、西瓜、芋等の栽培に利用されて居る所もあるが、陸軍の演習地となつて居る所もあり、砂スキーも行なはれる。京都帝国大学及鳥取高等農業学校は砂丘試験地を有する⁹⁾。

日本一の大砂丘

東は細川より多鯨ヶ池、浜坂、十六本松、更に千代河口を横切つて賀露、湖山池、白兔に亘る東西三里南北二十町の大砂漠こそ日本一の鳥

取大砂丘である。ザク／＼と踏む砂の感触、黄砂に配する青松、緩やかに流れる砂丘の弧線、ウルトラマリンの海。外来客の瞳目して快哉を叫ぶ大砂丘

(中略)

久松山を慈父に喩ふれば砂丘は五万市民を育みし慈母である。鳥取隊隊長士の勇敢と健脚天下に名あるは砂丘の賜物と言ふも過言にあらず。近年此の砂丘の名遍く知られ山陰観光客の必ず立寄るべき地となれるは寧ろその埋もれたるの久しきを欺く。

春の防風草掘り、夏の舟出、海水浴に秋の清遊冬期は積雪二尺に及びスキーの最適地にして高山に行くを要せず、殊に雪なき時も砂スキーによつて斜面を馳すべく、又駟驢驢馬の曳く砂ソリあり、砂丘自動車ありて四季その興趣を異にす¹⁰⁾。

鳥取砂丘 鳥取市浜坂

日本最大ノ黄砂丘ニシテ広漠タルコト沙漠ヲ連想セシムルニ充分タリ。バルハンアリ「浜坂ノ播鉢」トシテ有名ナリ。春秋ノ期ニハサンドスキーニ、冬ハ白銀乱舞シスキー場トシテ好適ノ地ニシテ近來山陰ノ一名所トナレリ
バルハンハ直径米深三十米ニモ及ブ¹¹⁾

これら上記の引用文と似た内容の文章が、ほぼすべての観光資料に見られるようになる。そのため、昭和期には、鳥取砂丘は風景としての価値が認められ、観光地として内外に認知されているのだと考える。

大正期まで観光地としての地位が危うかった砂丘に、このような確固たる風景としての価値がなぜ認められるようになったのか。その原因のひとつは、大正期の交通網の発達が関わっていると考えられる。大正期の案内記の緒言にもあったように、この時期に山陰線が全通しており、それに伴って、山陰を訪れる観光客が増えたと考えられる。鳥取砂丘は、しばしば著名な文学者の作品内に登場しているが、これも多くは大正期から昭和の初めにかけてのことである。幼少期を鳥取で過ごした坂本四方太¹²⁾、一緒に砂丘を訪れた里見淳と志賀直哉¹³⁾、「砂丘」という言葉を始めて歌に使用した有島武郎¹⁴⁾、有島と交流の深かった与謝野晶子¹⁵⁾、小説『砂丘』を書いた阿部知二¹⁶⁾らが、砂丘を訪れるなどし、紀行文

や歌や小説の中にこの地を登場させている。

この時期に出された砂丘についての文章には、2種類あると考える。ひとつは「砂スキー」や「春の防風草掘り、夏の舟出、海水浴に秋の清遊」「砂ソリ、砂丘自動車」などの表現からわかるように、行楽地の名残を思わせる「遊び」の要素を持ったものである。これに対し、「ザク／＼と踏む砂の感触、黄砂に配する青松、緩やかに流れる砂丘の弧線、ウルトラマリンの海。外来客の瞳日して快哉を叫ぶ大砂丘」、「日本最大ノ黄砂丘ニシテ広漠タルコト沙漠ヲ連想セシムルニ充分タリ」などの文が表しているのは、風景として「発見」された砂丘の姿である。このような砂丘の描写は、時代を経るごとに増えてきている。

この「見る」価値の重視に拍車をかけたのは1963年の国立公園指定と2008年のジオパーク認定¹⁷⁾であると考えられる。これらの二つは、砂丘の自然風景に注目した結果、認定されているものである。

西田正憲は、『瀬戸内海の発見 意味の風景から視覚の風景へ』（中央公論新社、1999年）の中で、明治後期に、わが国において近代的風景が確立したと述べている。彼は、著書の中で、伝統的風景の中では風景としての価値を持たなかった瀬戸内海が、近代的風景の確立とともに価値を見出されていったことを示した。彼の考える伝統的風景は、白砂青松に代表され、また『万葉集』やその他の和歌集に詠まれる歌枕になっている風景であり、近世以前の、人の思いを投影させて成立しているものである。このような伝統的風景のみが認められていた世界に、西洋文明がもたらされた結果、明治後期より、近代的風景の定着が見られるようになる。何が美しい風景なのか、「見る」価値の基準に変化が起こったのである。鳥取砂丘は、伝統的な風景の考え方からすれば、風景としての価値のない土地である。しかし、見方の変化が起こり、美しい、見る価値のある風景となった。つまり、風景として「発見」されたのである。瀬戸内海が受けたような、日本人の風景に対するまなざしの変化は、鳥取砂丘にも起こったといえよう。この変化の特徴としては、「風景の珍しさ」が挙げられると考える。国立公園には、海や森など、自然が「生きている」と感じられるような土地が多い。1934年、初めての国立公園として8つの地域が指定された。これらは山、海・湖、火山であり、生き生きとした自然のエネルギーを感じられるものとなっている。2年後に追加された4つの地域も火山、

山、海岸などの、同様のものである。こういった地域が国立公園として一般的である中、砂丘のような土地は、日本にあまりないもの、日本にとって珍しい土地であったが故、風景としての価値を「発見」されたのだと考えられる。このような珍しい土地であることが転じて、後に受ける、地質に注目したジオパーク指定につながるのだろう。

言語表象から見る砂丘風景の「発見」

砂丘の風景としての扱い、その移り変わりは、砂丘という土地を示す言葉にも表れている。

前述の引用文からもわかるように、砂丘はしばしば「砂漠」と表現されることがある。日本らしくない珍しいものであることから、「砂漠」という日本の外の地域、日本では珍しい土地を重ねられるのだと推測する。

明治・大正時代の案内記では、「砂丘」という表現は見られない。代わりに使用されているのは、「砂漠」と「浜」である。「浜」は日本人に馴染み深い、海岸を想起させる表現である。そのため、「砂丘」という概念が成立する前に、「浜」という表現を使用することは不思議ではない。日本に美しいものとして古くから存在する海岸を想起させて、風景としての価値を置こうとしているのだと考える。

一方、「砂漠」という表現は、日本に馴染みのない土地を指している。この「砂漠」という表現は砂単体で価値を置こうとした苦肉の策なのではないだろうか。『瀬戸内海の発見 意味の風景から視覚の風景へ』の中で、近代的風景は明治後期に定着したとされている。この少し前、幕末から明治にかけて数多くの地理書が日本で作成されている。この時代に作られた地理書は、西欧からの情報を基にしたものであり、近代的風景の定着に一役買っていると考えられる。福澤諭吉の『世界図説』（1869年）は、世界各国の気候風土やその地で暮らす人々の生活などを記した文献である。この附録には、地理や天文について述べている部分があり、その中の「自然の地学」という項目には、砂漠が次のように述べられている。

広き砂原に雨降らずして草木生長せざるものを砂漠といふ。亜非利加、荒火屋の砂漠、これなり。日本に砂漠なし¹⁸⁾。

この部分では、はっきりと「日本に砂漠なし」と述べられている。また、同文献に収められているアラビアの項目では、「荒火屋は大国なれども、砂漠とて辺もなく広き砂原ありて且気候は熱く雨は少く、住ふに宜しからざる地なり」¹⁹⁾という記述があり、砂漠に風景としての美しさを感じると思ひ難い。これらの文章から感じられるのは、「日本にない珍しい土地」という印象である。「砂漠」という表現から、砂丘は珍しさを感じる土地として価値を見出されたのだと考えられる。

大正時代、山陰線の全通と前後して、鳥取砂丘に幾人かの文学者が訪れていることは前述の通りである。彼らは、しばしば鳥取砂丘を訪れ、自身の作品の中に彼の地を描いている。西田氏は『瀬戸内海の発見 意味の風景から視覚の風景へ』の中で、風景の見方と文学、絵画などとの関係について次のように述べている。

風景観は言葉や絵画などを通じて普及する面をもつのであり、それゆえ文学や絵画などの表現様式と風景観は強く関係していると考えられる。つまり、表現様式の変化が新しい風景を捉え、風景観の変化が新しい表現様式を促すというように、相互規定的でさえある²⁰⁾。

この文章から、砂丘の価値を考える際、彼ら文学者たちが、砂丘を訪れ、その地を作品内に登場させたという行為は、重大な意味を持つと考える。

本来全く観光とは関係がなく、歌に詠まれるような土地でもなかった砂丘は、土地のものめずらしさから観光案内に少しずつ加えられるようになった。そのすぐ後に交通網が便利になり、観光旅行ブームが起り、文学者たちが砂丘を訪れるようになる。そして、彼らが自身の作品内に砂丘を表すことで、砂丘は新たな現代の歌枕のような土地の要素を得たのではないかと考える。つまり、砂丘という土地の珍しさを要素とする近代的風景とは異なった、人の感情を重ねることで生み出される見る価値、伝統風景にも見られたような価値も、生まれているのではないだろうか。彼らが生み出した風景としての価値は、砂丘を観光で訪れる人の「見る」価値を補強しているのだと考える。瀬戸内海が近代的風景として「発見」されたのとはまた異なる、砂丘独自の風景としての「発見」がなされたのである。砂丘は、近代的風景と新たに見出された伝統的風景の二つの面

を併せ持つ風景として「発見」されたと考えられる。

終わりに

砂丘という砂ばかりの大地には、そもそも万葉集などの和歌集に詠まれたような伝統的な風景としての価値もなければ、瀬戸内海のように外国人に見出された近代的風景としての価値を有していてもいなかった。風景としての価値を持ちづらい土地であったと考えられる。

しかし、日本でありふれた景色ではなく、外国を想起させるような土地であることから、土地そのものの「珍しさ」に目を向けられるようになる。そして、近代的風景としての価値を見出された。

また、砂丘の観光化が進む中で訪れた文学者達の作品に登場したことで、伝統的風景のように人の感情を重ねられてきた。本来存在しなかった伝統的風景と似た価値が、にわかに発生し、現代にも消えずに残っているのだと考えられる。

現在の鳥取砂丘には、風景を眺める、異国情緒を重ねる、砂丘という大地を使ったアトラクションを楽しむなど、様々な観光要素が用意されている。これらの根底にある砂丘の価値は、単体では見出されづらいものである。土地の「珍しさ」を主張する、文学者達が描き出した人の感情を重ねるなど、何かしらの要素を付け加えることで、風景として新たに「発見」された土地なのだと考えられる。

註

- 1) 「地域の地史や地質現象がよくわかる地質遺産を多数含むだけでなく、考古学的・生態学的もしくは文化的な価値のあるサイトも含む、明瞭に境界を定められた地域」を指す。
- 2) 鳥取県編集・発行『鳥取県史 近代第3巻 経済篇』1969年、316頁
- 3) 鳥取市教育会編『鳥取案内記』吉田活版所、1907年、35頁
- 4) 鳥取県・鳥取市役所『鳥取案内』1911年、緒言より
- 5) 『鳥取案内』鳥取市役所、1912年、本城常雄編著『鳥取案内 郷土シリーズ3』鳥取市教育福祉振興会、1976年
- 6) 大村康久編『鳥取砂丘』富士書店、1993年
- 7) 日本国語大辞典第二版編集委員会、小学館国語

- 辞典編集部編『日本国語大辞典 第二版 第5巻』小学館、2001年、269頁
- 8) 日本国語大辞典第二版編集委員会、小学館国語辞典編集部『日本国語大辞典 第二版 第3巻』小学館、2001年、1263頁
- 9) 鐵道省『日本案内記 中國四國篇』博文館・日本旅行協會、1934年、249頁
- 10) 田中貴右『観光の鳥取』鳥取県観光協會、1935年、19-20頁
- 11) 日曹製鋼米子製鋼所編『山陰案内』日曹製鋼米子製鋼所、1938年、3-4頁
- 12) 坂本は1873年(明治6年)に鳥取県で生まれた俳人である。彼は自らの自伝的小説「夢の如し」の中で鳥取砂丘について描写している。
- 13) 里見と志賀は1914年(大正3年)に共に鳥取砂丘を訪れている。里見は著作「世界一」(1920年)の中で、砂丘のことを「砂漠」と呼び、また「恐ろしくなるほど広漠たるもの」というように、砂丘の広さについて述べている。
- 14) 毎日新聞社編の『鳥取砂丘』(1958年)によると、鳥取砂丘を「砂丘」という言葉ではじめて歌に詠んだのは有島だとされている。「浜坂の遠き砂丘の中にして 侘ひしきわれを見出でつるかな」という彼の歌は、これを詠んだ1か月後に彼が亡くなったこともあり、砂丘という言葉が世間に広められたようである。
- 15) 有島と親交の深かった与謝野晶子は、彼の死後、夫と共に砂丘を訪れ、歌を詠んでいる。「沙丘踏みさびしき夢に与(あづ)かれるわれと思ひて涙流るる」「ここに来(こ)し友先づあらず然るのちその兄弟(はらから)の見してふ沙丘」
- 16) 小説『砂丘』は、砂丘に家族と住んでいる女性・千賀を主人公とし、彼女の暮らしと人間模様とを描いたものである。主人公・千賀の気持ちと作品の舞台となっている砂丘とを深く絡め描かれている。
- 17) 鳥取砂丘は現在、山陰海岸ジオパークの一部となっている。山陰海岸ジオパークは、2008年に日本ジオパーク委員会から「日本ジオパーク」の認定を受け、さらに2010年に世界ジオパークネットワークに加盟している。
- 18) 『福澤諭吉全集 第2巻』岩波書店、1959年、661頁
- 19) 同上、597頁
- 20) 西田正憲『瀬戸内海の発見 意味の風景から視覚の風景へ』中央公論新社、1999年、173頁